

私の芝居の原点

石岡和総〈2016年度実習生〉

私が初めて演劇の道に進もうと思ったのは、高校2年生の冬だった。それまでテレビや映画を見るくらいで、演劇を生で観ることなどなかった私にとって、学校で観た東京演劇集団風の『ハムレット —to be or not to be』はそれほど印象的だった。

普段自分たちが使っている体育館が劇場に変わっていること、目の前で大人が本気で芝居をしている姿、絶対に寝ると思っていた友達が芝居を見ている姿、それらすべてが私に上京を決意させた。専門学校での2年間を経て、私は劇団風に実習生として入団した。

実習期間が始まってすぐ私は『ヘレン・ケラー ～ひびき合うものたち』の巡回公演で役に就くことになった。自分が高校生の時、観る側だった場所にいきなり立つことになったのだ。そこで出会う若い観客たちの姿は私に多くのことを感じ、考え、経験させた。その後、東京での公演でスタッフに就いたり多くのことが目まぐるしく進んでいく一年の終わり、実習生卒業発表として『最後のゴドー』（マテイ・ヴィスニユック作／江原早哉香演出）を劇団員の全員の前で発表した。

その後、3年間の研究生期間を経て劇団員になった今、この実習生の1年間は私の役者としての始まりの時であり、立ち返るべき原点であると感じている。今の社会では、教えられたことをうまくこなせる者が優等生で、こなせない者は劣等生として見られるだろう。だが入団してまずやったことは、芝居をやる方法を学ぶのではなく、実践だった。実践の中で何を見、何を聞き、何を感じたかが、「なぜ今、演劇をやるのか」という問いを見つめなおす一つの柱となっている。このことは芝居をやるということだけに留まらず劇団活動においても同じだ。現在、約250ステージ以上の公演と、それらを作る活動の中で、私の持つ原点と、新たに出会うものと共に劇団を、劇団活動を創造していきたい。